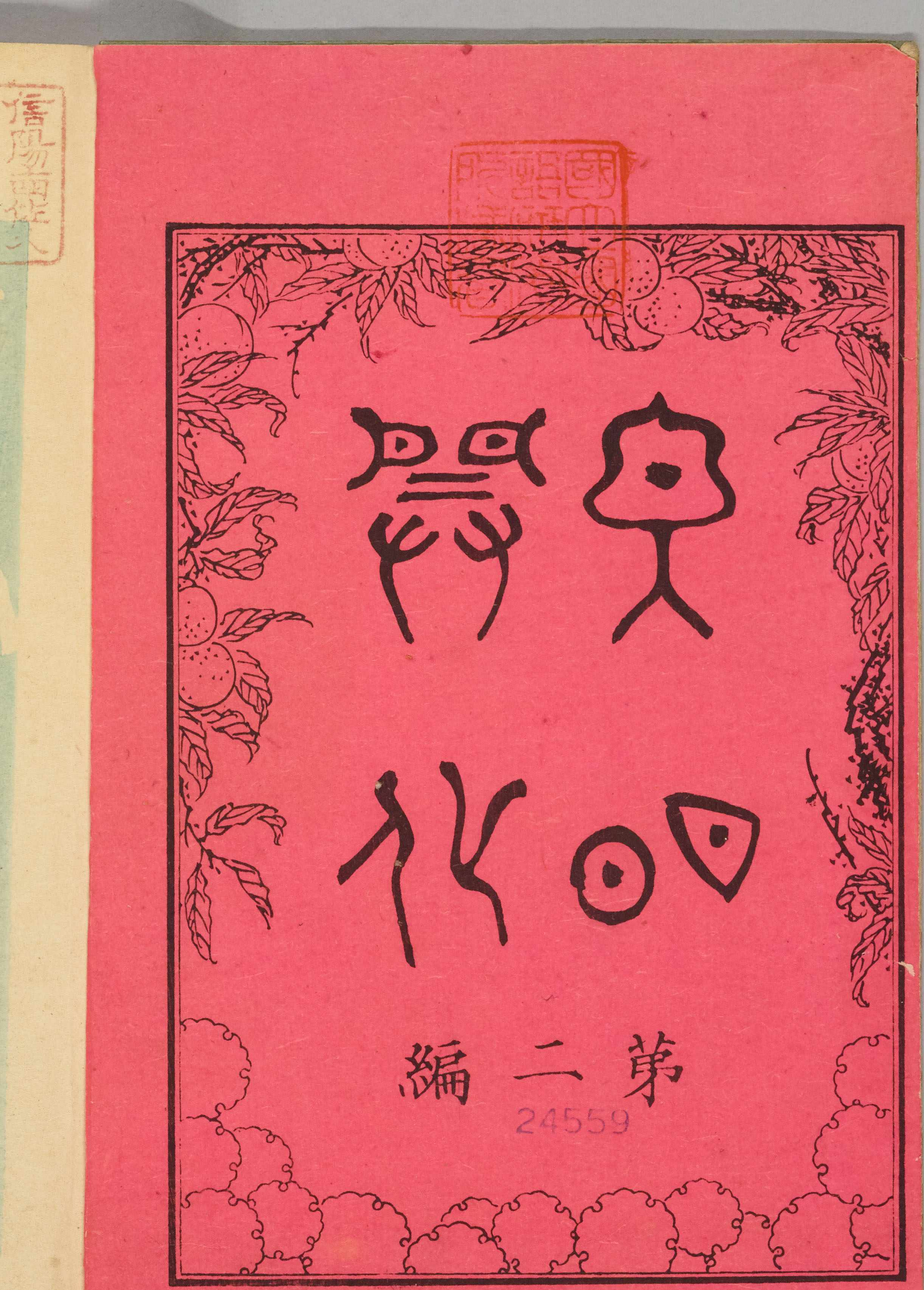
加藤祐一著述

# 文明開化

二編

上

W31
Ka 86
2-上
1001169331



# 第二編

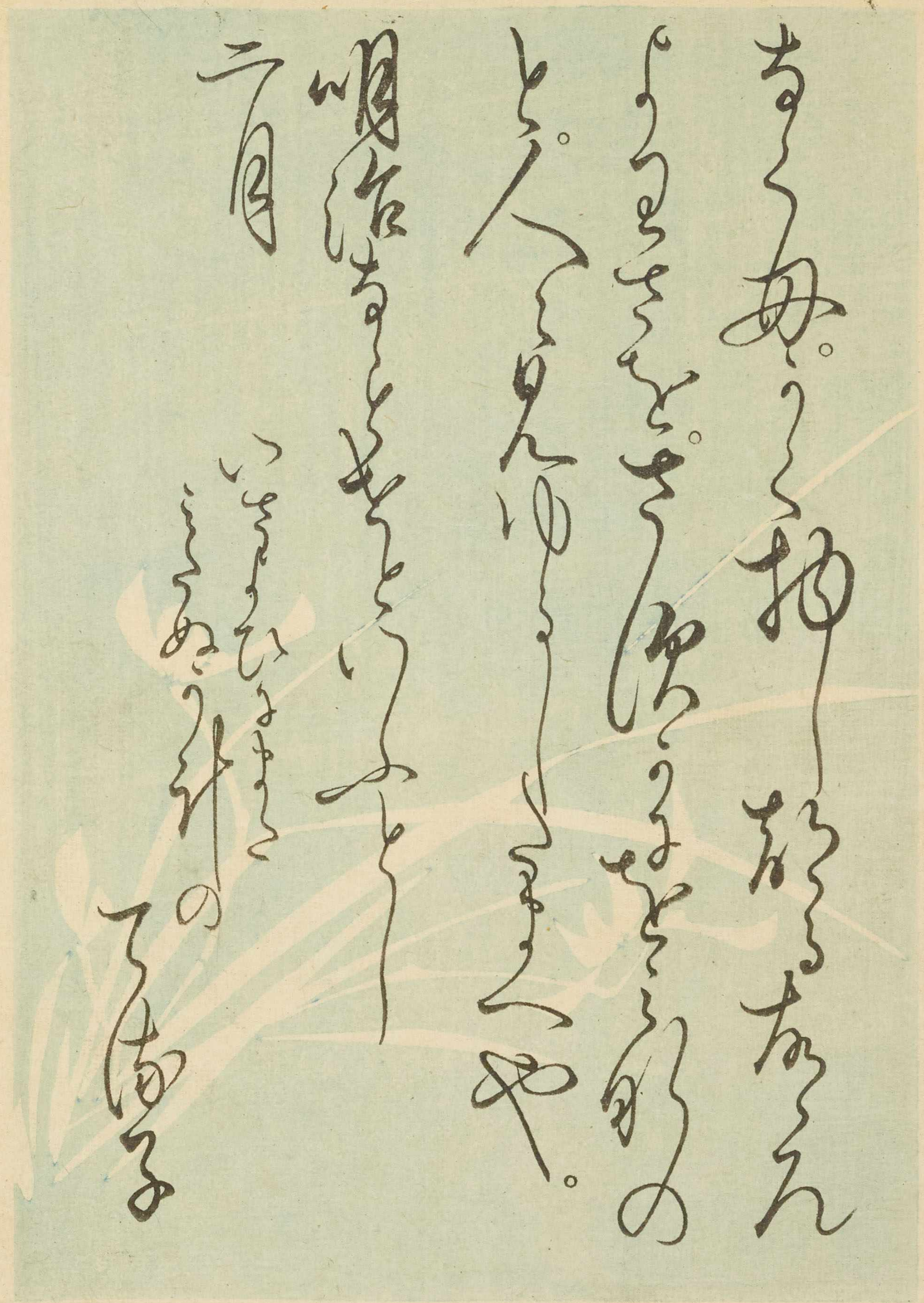
24559

信陽画院
海虎收藏
藏書之印


松川半山直水画
刀工 田中忠次

伊邪那岐ノ大御神
筑紫ノ日向ノ橘ノ
小門ノ阿波岐ガ
原ニ到坐テ夜見ノ
国ノ穢レヲ禊祓シ
玉フ此時
天照大御神
月讀ノ命
建速須佐之男ノ命ノ
三柱ノ貴キ御子
成出玉フ





加藤祐一著

# 文明開化三編目録

上の巻

○天地開闢の始まり除

○神代開闢の事

○神武天皇の大和へ御東征の事

○開化に至る迄の事

○西洋も最初は野蛮なりし事

○下の巻

○明治維新の事

附物の名を擇ぶべきもの

○ 同聲のもの同じきもの

○ 同聲のものゝ如きもの

○ 清く響くもの

○ 同聲なるもの

○ 異化のやうなるもの

○ 多年のことを經たる後人のまねするもの

○ 同名のものゝ如きもの

人のまねするものゝ如きもの

多年のものゝ如きもの

文明の発展に伴ひ社会の中堅たる紳士
かゝる疾病に罹るもの多きは如何なる
故なるや。
此病は主として精神を過労せしめ
又は身体の運動を欠くときに起るべし。
されば学校の生徒にも此病多く
又商業社会の人にも多し。
されど農業社会の人には少なし。
されば此病は文明の発展に伴ひ
生ずるものゝ如し。
されば此病を予防するには
なるべく精神を過労せしめず
又身体の運動を欠かざるを要す。
されど洋学者流の

孫子勢篇

凡治衆如治寡分數是也鬪衆如鬪寡形名是也三軍之衆可使必受敵而無敗者奇正是也兵之所加如以碬投卵者虛實是也

凡治衆如治寡

凡は大抵の事と云ふ意にて、大抵衆を治むるも寡を治むるも同じ事なりと云ふ意なり。

分數是也

分數は分と數とにて、分は分隊、數は數目なり。

鬪衆如鬪寡

鬪衆は衆と鬪ふなり。

形名是也

形名は形と名とにて、形は旗、名は鐘鼓なり。

三軍之衆可使必受敵而無敗者奇正是也

三軍は大軍なり。

兵之所加如以碬投卵者虛實是也

碬は石なり。

清淨世界に歸るまでぞ。
こゝを以て我國のたゞ
なるにあらず。海のやうに
まるで。我國のたゞ
待のみありのまゝなるを
を知る。而して淨土
の神の御名を天
の御名は米まもる
の時よ。言天
此天の御名を

が。出るのいろいろ
ゝゝ時も。いまぢ判然とそ
ど。そのこゝろ
ゝゝ婦人のこゝろ。それを人のこゝろ
ゝゝぬまでいまぢ判然がありやかつ
ゝゝまでそ。そのあとのこゝろ
ゝゝ婦人のこゝろ。それを人のこゝろ
ゝゝまでそ。そのあとのこゝろ
ゝゝぬまでいまぢ判然がありやかつ
ゝゝ時も。いまぢ判然とそ
ど。そのこゝろ

まづ其の神の魂の乃至御靈の神靈の神靈の神

よりて。なり出るの幷の
の幷
幷とも。その次なり
あくそ
中もの
まで
常一定の幷。よく麻志の幷。
迫の
幷。角材の幷。活物游毋
大斗乃至の幷。

并。伊弉諾の并。合きて十二柱。
宇比地迷の并より次ぎく。伊弉冉の并を
女并と并せて。二柱を一世とこのぞ。
并代七世とやまもる。ぱひ
并こと。上のみ柱のてる并の
乃ちを抜けもりて。その物。等の事を
で。彼の脳肉のるが。是を
のとくふやうるものぞ。然れ伊弉冉
并去。てより并よ天の沼矛を給りて。

糸関を造り関ちよまの治を受ふひ。天の降格のよふ
ふひ。そのしまおまそぐ
ちまひ。そのぬぐ
との神舞奥波比ふひ。ぐ
ふひ。それまぐはひ
ちまひ。ぐ
ふひ。ぐ
ふひ。
ふひ。
ふひ。

多くの場合。天照大神、月読の命、建速須佐之男の
三柱の神を別天神と申しまして。
宮の三柱の神でござる。
神代の初めに
の活躍をなさるお方。
むすびの神が。幾度か人間の姿
武天皇まで。今上陛下
ずせんふきて。万世不朽
しばやまに依りて。全く天照大神
まる。今も此国土を照らす
神代の初めに
天照大神

の温容を望み、人間を中心として居るまでで。此の世界は非情の国土まで活して居るまでで。此の世界は非情の国土まで活して居るまでで。此の世界は非情の国土まで活して

多くの人間の影響を受けます。あるいは世間がまたいろいろ英雄が好いの悪いの、あるいは偉大なる功業をなしたものの筆を仕遂げたいの、あるいは孫を教育したいの、といろいろなことがありましょう。また物質的の慾望を充たしたいの、名誉を得たいの、あるいは社会の風教を維持したいの、よい衣服を着たいの、美味を食いたいの、あるいは美人を妻にしたいの、というようなことがありましょう。また人間の慾を遂げたいと思うのが、すなわち人間の慾望であります。

ろうそくをともしたりいろ〳〵のかざりものをしたりしてまつります。ひるの神さまのまへにはおまいりするものがすくないやうですが、夜の神さまのまへにはおまいりするものがおほくつめかけます。それはおまいりするものがおほければおほいほどよろこばれるからです。まつられるものは



ぜんまいをとるためにやまへいくことがあります。ぜんまいはわらびのやうなくさですが、わらびよりもおほきくなります。ぜんまいをとるのはおもに春のことです。

ぜんまいをとるためにやまへいくことがあります。ぜんまいはわらびのやうなくさですが、わらびよりもおほきくなります。ぜんまいをとるのはおもに春のことです。

ぜんまいをとるためにやまへいくことがあります。ぜんまいはわらびのやうなくさですが、わらびよりもおほきくなります。ぜんまいをとるのはおもに春のことです。

ぜんまいをとるためにやまへいくことがあります。ぜんまいはわらびのやうなくさですが、わらびよりもおほきくなります。ぜんまいをとるのはおもに春のことです。

ぜんまいをとるためにやまへいくことがあります。ぜんまいはわらびのやうなくさですが、わらびよりもおほきくなります。ぜんまいをとるのはおもに春のことです。

ぜんまいをとるためにやまへいくことがあります。ぜんまいはわらびのやうなくさですが、わらびよりもおほきくなります。ぜんまいをとるのはおもに春のことです。

ぜんまいをとるためにやまへいくことがあります。ぜんまいはわらびのやうなくさですが、わらびよりもおほきくなります。ぜんまいをとるのはおもに春のことです。

ぜんまいをとるためにやまへいくことがあります。ぜんまいはわらびのやうなくさですが、わらびよりもおほきくなります。ぜんまいをとるのはおもに春のことです。

ぜんまいをとるためにやまへいくことがあります。ぜんまいはわらびのやうなくさですが、わらびよりもおほきくなります。ぜんまいをとるのはおもに春のことです。

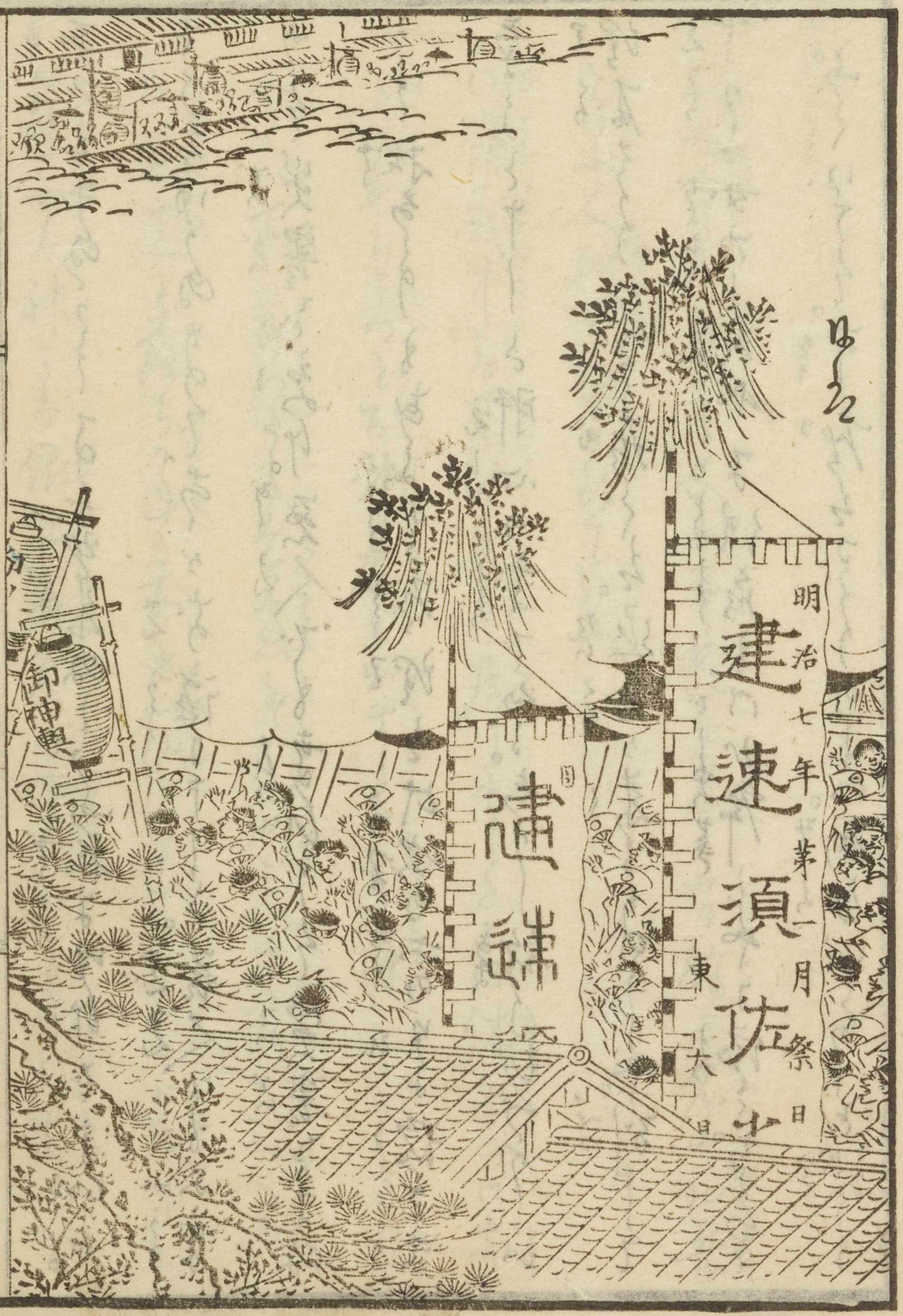
ぜんまいをとるためにやまへいくことがあります。ぜんまいはわらびのやうなくさですが、わらびよりもおほきくなります。ぜんまいをとるのはおもに春のことです。

或る事を喜ぶ。或る慶事がある。
一ぜ
多数の中より人を選ぶ。倫理的行為を命ずる。
命令を下す。
も法律を命ずる。
なまじ学者が多いと。
みだりに人を殺す。
石のやうな。
この様な道理のない道理。
百万年も
澤撰
大きくなる。
百万年も

まつ。ゆうべ。まこと獨ひもすがら
のごめや。拘弁こののんが。
ち。洋弁かぎなの弁のの家里
関のふ人なり。ちなみを綾
なぎ彼の弁の口答よ。汝独う着
そぶやうを建んとのまつこと。
と。弁の方物をかしーみの口
れ悪ん先ぐ駐まる道のあ

まつ
りえ
ゆう
降ふ
とな
勇り
ますで。
支そ
大風で大木ぐ折
よ
あ
ふそ
ふそ
ふそ


御神燈
御神燈
御神燈
御神燈
御神燈
御神燈
二編上
九
刀工 王花堂


明治七年
茅ノ一月
東大
祭日
建速須佐之男命
建速須佐之男命
卸神輿

あくまでも悪人をまもってするがせまいものだ。

さうゆうものだ。

みてゐるものだ。

うまく捕まるまいぞ。

言ふまでもなく理屈ばかりいつて居ては。

一ぷくしてゐるのも。

悪人でもあるまいし。

災害をまぬかれ

海をやーと。

この次の六の

肝心のやつ

逃げるもの

別して

女中部屋

女中

悪いもの

まちよう。

このとき時正ちょうど人も。年齢を五十歳ばかりの人が。

とりまして。

ご清義申しますよう。

なおゆえ。ちょっとお邪魔ながら伺いますが。

ありがとうございます。ご用向きをお聞かせ願いとう

ございます。

何ぞお気の毒なことでもあるのか。

なにぐずぐずしてござる。

ないくらいまでとんぢまつたが。兵介今の心持は。
まるで夢のやうな。何だか狐に化されてゐるやうな。
つまり翻弄されてゐるやうな。全く天照大神の御
蔭だ。有難い。勿体ない。此世ふ利有るうちは。
商ひやうによつては。幾らでも儲けられるのだ。
我が子孫が有る限り。此家を潰さないやうに。
末永く繁昌を続けて行かなければならない。
あゝ有難い。勿体ない。此人間ぢや。此人間ぢや。
なんぞと。兵介は。一人で心の中で。
繰返して。

こゝに俳諧師（はいかいし）の事（こと）を書（かく）べきやうもなけれど、我（わが）社（やしろ）に詣（まうで）給（たま）ふ俳諧師（はいかいし）多（おほ）く、又（また）それ等（ら）の人（ひと）の書（かき）給（たま）ふ短冊（たんざく）の多（おほ）きまゝ、こゝに書（かき）加（くは）へて置（おく）。

こゝに俳諧師（はいかいし）の事（こと）を書（かく）べきやうもなけれど、我（わが）社（やしろ）に詣（まうで）給（たま）ふ俳諧師（はいかいし）多（おほ）く、又（また）それ等（ら）の人（ひと）の書（かき）給（たま）ふ短冊（たんざく）の多（おほ）きまゝ、こゝに書（かき）加（くは）へて置（おく）。

こゝに俳諧師（はいかいし）の事（こと）を書（かく）べきやうもなけれど、我（わが）社（やしろ）に詣（まうで）給（たま）ふ俳諧師（はいかいし）多（おほ）く、又（また）それ等（ら）の人（ひと）の書（かき）給（たま）ふ短冊（たんざく）の多（おほ）きまゝ、こゝに書（かき）加（くは）へて置（おく）。

こゝに俳諧師（はいかいし）の事（こと）を書（かく）べきやうもなけれど、我（わが）社（やしろ）に詣（まうで）給（たま）ふ俳諧師（はいかいし）多（おほ）く、又（また）それ等（ら）の人（ひと）の書（かき）給（たま）ふ短冊（たんざく）の多（おほ）きまゝ、こゝに書（かき）加（くは）へて置（おく）。

こゝに俳諧師（はいかいし）の事（こと）を書（かく）べきやうもなけれど、我（わが）社（やしろ）に詣（まうで）給（たま）ふ俳諧師（はいかいし）多（おほ）く、又（また）それ等（ら）の人（ひと）の書（かき）給（たま）ふ短冊（たんざく）の多（おほ）きまゝ、こゝに書（かき）加（くは）へて置（おく）。

サアそこでくる。我がねのきな
ずらの天まを。天照大神
ゆかしやな依く。この旗
印(はたじるし)を二本ふより繋(つな)ぎ
うなもので。旗印(はたじるし)の実(み)
の名の落(おち)そのを。旗印(はたじるし)
かとる。旗印(はたじるし)の釈(わけ)未(ま)だ依(よ)
ぬ。そのまゝに。行(ゆ)くがよへ
う二本(ふたもと)ふこうう並(なら)るのどや。
世界(せかい)を照(てら)すなよ。日(ひ)球(きう)のあまで
天照大神(あまてらすおほみかみ)の。我(わ)が国(くに)の
様(さま)どやな依(よ)く。それ
ぬの血(ち)

ぶんりの道理を会得あそばされそうなものだが。よくよくまの当りまの当りまのあたりまのあたりまのあたり

紀元

まうるが。つのある諸ぐ公つて。始の大周をさ
うそうあもちひさる周一。天孫が天津りそつ
るう。道理なおいてを。大周そひ始めさそ
孫れき年歴を指てを。弥武てるるの紀元を定ハ
周の恵王の世よあと定つくる。支より以前ハ
なるが。日本のありが定くる事やうな思そ
ふあつくまひあぐる。あうそ年代ハそれ
ぞれ

文字を学(セイ)んで。家(うち)で行(おこな)ふ事も
[illegible]
日本(にほん)の中(なか)で。大(たい)切(せつ)な国(くに)や
[illegible]
[illegible]
のびやか。私(わたし)共(ども)の国(くに)で。昔(むかし)から
天地(てんち)の[illegible]
野(や)で。捨(すて)べつの[illegible]
漢土(かんど)まで洋(やう)も。同時(どうじ)に[illegible]
[illegible]
[illegible]

利かない者の多いのは今に始まった事ではないが、或る者は全く海外を知らず、他国の人の生活状態を見ようともせず、或は見ても自己の国よりも劣れる国民なりと軽蔑して、自己の国の長所のみを誇張して、他国の長所を見ようとしないのは、実に困ったものである。井の中の蛙大海を知らずとは、全くこの事である。

天地の間には、まだまだ我々の知らない事が沢山ある。我々の知っている事は、ほんの僅かである。我々の知っている事は、ほんの僅かであるという事を知っている者は、まだ賢い方である。我々の知っている事は、ほんの僅かであるという事を知らない者が多いのである。

汗湯をつかひ出来ることがまだ
よくあるものもあれど天
然のものが備はるやうなので。
一方の汗湯が出来ると
ほとんど一時なくなる
お連なひ。扨まこと天然水を
おいて天津りやうなものと
おもひさるる人もあれど。
これまた一ツの天津りやう
お髭ひ。毛一ト筋の體も
お孝のやうなめのまで。人の體

十ぐらいの兵隊。どもびっくりされど。再度舞は肝要のものぢゃ。頭脳ばかりでなく大切なせうやうぢゃ。人の魂とは胸にあるといふ伝を守ぐ。両方共胸にあるもの。胸は肝ぢゃ。肝が取られて死ぬる。胸にある魂を抜かれたら死ぬるものぢゃ。肝が大切なものぢゃ。人の魂とは胸にあるといふ伝を守ぐ。両方共胸にあるもの。胸は肝ぢゃ。肝が取られて死ぬる。

まあうるさいな。静かにおしやれ。眼がさめるまでそこに居るのだ。頭の形がへんだぞ。

まりうまく。眼がさめるまで待つのだ。

を押さないでおいで。日本国より都の方が広いわ。

きいおまえ。それ丈ありゃ結構だ。

うまく。国がせまくて。私のいる所がない。

のをしてよいですか。日本の中ぢゅう。

を壁にしてる。東京大阪のやうな都会の地は。

まるで押すな押すなの地で。日本全国の国でもまだ。

ちハこ
葉ぶ粒もぐもの地ちれぐ。そ
そのの。大抵じやこのうて。
そうう度いうこうて。搬そ
まきま。国の大小こよ
ぬまをひでよ
考くく
○法ほまた。西ほう剣出てこもるあぶやそいふなし。
時時ぢよ信くく。並ばまて。
なの。
地ちよもつこちのなこと。

ふるまおそろしきものやうに思ひ給ふめり。
とつくにてまれにあるをもてとりて。まのあたりにしてまれにあるをもてとりて。まのあたりにしてまれにあるをもてとりて。まのあたりにし

なれやぬるりやとて考へて法
やうの事を忘理り別
二つとのやうなれど。
云理のひとつよ過きるやう
理りの刻出ものなれど。
きどの時計が家に
あれば時を正理
あり。又
何りど正理
異りまた一時

うまぐもあるまいや。今ごろ八九年もまのうちや。世よ
の中ぢやで。桃灯もちやうちんもぬものまで。皆ひかり
物の強がつの時分。桃灯でありますをあれ
籠が出来ませう。摺物ばかり沢山ひきまする。梅暦
うそ本ばかりで。町所をまはりまする。やく
などあいとうお籠もないうち。提灯の時分。同じやうな提灯つけいで持ち
計りで桃灯をつけてゐる。何の役もたゝぬあれ




梅の
時の
梅迎会
寄合

まち抔摩さすり
×
月をあらくあまもれ。
つきき
月がもう。式挑灯を用よまうぬうとりて。
ひと
人のうちいまうと。
ちょうちん
挑灯を用ずに。
ひと
人のうちいまうと。
ちょうちん
挑灯をつけて居る。コレ
なんぢ
汝が用をありて
ゆく
行のに。
ひと
人がそこにあるものがといふて。
ちょうちん
挑灯を消すなと

まごど 盲人さんどごやゆきゃ。なごろよ
ちやのこもとろ 泣くもとろ泣くあるごとろいつとろ。二人へ
て泊ごなごろよ灯の泊てあるまち
ろぐるおるで。まより盲人
籠の岩殿ーまふつひそ物ろの
ぜ。それ 丈ごがあついち編も物で
ち。ろぐおまち
ち。時の
ろのまごと。

まで。
ぬ。
と
夫を
あの
梅西
ちよつと
挑灯と

そのとき
なに
そのとき
なに
なに
なに

さきに考ふると共に我が行くべき道を
そなふまいものでもない。人の為の用で
のみ。ドゆゑに人の為の権を持つ
のもの。これを捨てとも権を
ぢや。志の専なおいて。珍を曲げて
おもてとりそ。そこで時々ある

でまれなおよいふる。時ふ
よりまだ雨て曲げて売もの
まこと○異化の犬と不異化の犬の
延集まる。ある町角の事を
やう一匹の新犬のながく今
後風のおいをやらいふまで。世の中の
変ーまたが。仲間全体が同業がな
で。

れい　な
例　ごとく
まうとて。
藩町
あひぐ
の
敵
うち
のやう
に
志
おい
て。
ぞ
ひぐ
て。
僅
ぐ
一町
や
ま
町
の
境
を
ま
ま
ま

けちなやつだ。二里
締まれ。
三里のきそくなところ
なの影でもゆく。仲間
つの影でまもってゆくやる。
西洋仲間
まるで。
まるで。
西洋仲間
まるで。
まるで。
まるで。

ゐ猪ゐて紅あるくると
ゐらざる所をゐゐる犬ゐゐるものゐ。人間ゐ
我ゐゐの仲ゐが。人間の家
のゐ仰ゐで我ゐを待
ゐて。ゐゐ集ゐ界を争ふゐ
ゐ。ゐゐ迷仲ゐの起ゐを
ゐ。ゐゐ一足のゐの所ゐを
ゐ。ゐゐ仲ゐのゐるゐ。

のうちびかりあそれ
いよと。ぎょぎょ
字化をと吸ふ。
化でまる。
沸そのぎょ
出ど
の棒ん

ぎゃうさんあつて仲〻の仲よしでござりまする。それ故にお互ひに行き来をいたしまする。夫ある仲間ぢやによつて。夫ある仲間ぢやによつて。その夫ある仲間ぢやによつて。夫ある仲間ぢやによつて。夫ある仲間ぢやによつて。

うらうら
諸大代官屋敷まで
きと
とのぢやうれぬ
大名。おい
屋敷をおく
と
まち
ものうり
ござ
ござ
ござ

こそまりの町の大仲(いなか)まで。却(かえ)つて客(きやく)も仲間(なかま)
まり。この[illegible]
ぐ[illegible]
あいなのやうなもとりこ(ごと)
[illegible]。そこら(ごろ)
[illegible]
[illegible]
[illegible]

世界のこうかつ。さるかに。

ものも。藻町のたもと

こ風をうつて。

とりあつめる。

○ひりき猿のまねをする猿山の猿のまねをする。

とこうりきの山。猿づくり作山。

だく水あそびをしてゐるもの。かへつてゐるもの。

大谷の猿どまがよ

てお使(つかひ)ぶ。我(わが)ものの仲(なか)ろ人間(にんげん)もそのと
なもので。(ようおもひ)ぶ。金(かね)ぶ。(ようおもひ)ぶ。
おもふ。(ようおもひ)ぶあいろで。仲(なか)ろ人(ひと)もそのと
やうなある。辛(から)ぶ規則(きそく)といふものがあ
るまでぶ。(それ)ぶ。今(いま)ぶ。
いとけなきものもそのと。
壮年(さうねん)の悩(なや)みを

断岸(だんがん)絶壁(ぜつぺき)





ふるまって食をもらうがよう
で。あれを私みるてすみく。
べつ別に
うちひき老女の沢手
うへい
で。天二年よ兵を
ぐのこく
外国でりう。芸和設
ぼりる
ますやと。
お誘がそのち
ますよ。そ年ふまして。津
の
ぶで丹
ぐ。そ
ぐそのて
よ。

年ふる大猿がありて。ひとりを
と。是で其ぬ猿ばかり食ひころしてゐ
猿廻をとり詰まつて。ひとりの猿の
の猿のおもひまはつて。猿廻の
くらまつて。猿どもを大ぜい小ぜ
ぎやうをおもしろものが出て。
引て角中合せてがとの
猿引をよせて。猿どもの
なほ治つて。猿廻も引
ぢやまをして。猿廻の

うつくしいものでやそうな。

十月二十日。ひよりつづいて。

くるまの風ぞ。ふいやうに走まはる。

大まちを後にまた大風が吹出して。

ふるものを。なにもかもふきとばすやうな大風の凄まじさ。

ものすごや。まだやまずに。

まだ吹つのる。

風のやうに。

走まはるくるまの。

ひまをぬつて。

ちよこまかと。

走まはるは。

車夫ばかりでおりやんす。

ふるものを。

ふきとばすやうな。

大風の凄まじさ。

ものすごや。

まだやまずに。

まだ吹つのる。

風のやうに。

走まはるくるまの。

ひまをぬつて。

ちよこまかと。

走まはるは。

車夫ばかりでおりやんす。

ぢ
ぢをこねてゐるのを。海岸で評判を
きゝつけて。ぢの治療を
ある時海岸で評判を聞きつけて。ぢの治療を
起きた。非常の痛さを堪えかねて。
ある。非常の痛さを堪えかねて。
きゝおよぶものもあるが。
聞き及ぶものもあるが。
ぢ出ぢ。それを割る法
ぢ出ぢ。それを割る法

みるのである。

のそ。犬水の注ぎよ。こうのとき

ものでふれず。非常の勢いをもって落ち乱れる。つぎにふたたび

とびつくようにして落ちてくるのも。なかなか美しいものである。

ありのまま

ものやうまをうがつ

で。理りくつ

ぎだらけで

交叉

化

おこ

ざざ

ざざ

ざざ

24559

国立国語研究所
1001169331